

古代の誕生仏の調査

飛鳥資料館

飛鳥時代から平安時代にかけて制作された誕生仏は、各地の寺院に伝来したもの、寺院跡等からの出土品、個人蔵のものなど全国で約70体が知られている。しかし、その大部分は小像で細部の表現が省略されていたり、土中あるいは火中した例も多く、その制作年時、様式等の研究は従来あまりとり上げられる事がなかった。飛鳥資料館では、このうち東は栃木県から西は熊本県に至る20都府県から、伝来品・出土品を中心に44体の誕生仏を展示する「古代の誕生仏」展を53年度特別展示として開催した。その成果は既に図録『古代の誕生仏』として刊行したが、ここではその調査成果を要約しておく。

古式の誕生仏の作例には様式上二つの系統が認められる。一つは愛知県正眼寺像を代表例とするもので、古式の微笑をたたえた面長な頭部や衣の襞の表現は、法隆寺献納宝物中の止利式の如来像などと様式的に共通している。この他愛媛県石野氏像も同系統の作品として捉えられる。もう一つの系統は福岡県聖福寺像や香川県与田寺像で、同じく7世紀の作品ではあるが、三国時代の朝鮮半島の影響下に制作されたもので、長身に作り頭部が小さく肉髻も小さめにあらわすなどの特色がある。前者の系統に続くものとしては神奈川県堀氏像や奈良県薬師寺像がある。これらは表情などに厳しさが薄れ、体軀の表現にも柔かみのある質感が見い出されるところなど白鳳時代に入るべきであろうか。同じく後者の系統につらなるものとしては奈良県倉田氏像や愛媛県石丸氏像がある。

典型的な白鳳彫刻の作例としては、奈良県悟真寺像、大阪府田万氏像がある。丸い童顔や彈力の感じられる肌、質感のある裳の襞の表現などに特色がある。京都府久世廃寺から出土した像もかなり写実的になっているが、白鳳時代の終り頃の誕生仏の優品の一つに数えられるもので、この系統の作例には京都府笠置寺像、滋賀県大光寺像などがあり、これらは更に写実味の加わった表情や裳の表現などから8世紀に入っての作品と考えられる。

天平時代を代表する作品は奈良県東大寺像である。丸々と太った顔付、柔かい体軀の肉づけやいかにも幼児らしい上膊や腹部のくびれなど、天平期の写実的傾向が遺憾なく発揮されている。この形制を引き継ぐものに滋賀県善水寺像があげられる。豊かな肉づけや裳の表現に東大寺像と共通するところが多いが、頭部の形状や厳しさの加わった面相などむしろ平安初期の木彫像に見られる特色と共通する点があり、平安時代の作例に入るべきであろうか。

平安時代の作例はこれまで余り知られていなかったが、今回の調査を機にいくつかの作例が確認された事も大きな収穫であった。愛知県顕宝寺像の幅広い條帛や裳の表現は平安前期の特色をよく示し、京都府西林寺像や千葉県中島氏像、愛媛県北谷区有像の逆三角形にあらわす裳の折り返し部の表現、特に西林寺像の頭部や体軀の表現は、平安後期木彫像の特色をよく写しているといえよう。なお、この特展に因み、久世廃寺出土像の模造を製作した。（大脇潔）